

山崎町文化

'85-2* No.4



山崎町文化連盟編集発行

機関誌「やまさき文化」第四号発刊に際して

山崎町文化連盟会長 壺 阪 壽

文化連盟の機関誌「やまさき文化」も、回を重ねるに従って、その内容も随分と充実したものになってまいりました。それには勿論、編集に携って下さる方々の大変な努力もありますが、同時に町民の皆様方のふだんの文化活動の活発さの証拠だと思われまます。

最近のようにこれだけ豊かな時代になつてまいりますと、当然のことながら、単に物の面で豊かであるということだけではなくて、どうしても心の面での豊かさを求める様になってまいります。そしてその結果、そういった活動の出来る機

会とか場所を求めるようになってきますので、地域内におきましても各方面の文化活動が活発になり、多くの方々がそれに参加をされますし、或いは活動の場所である文化会館の建設を希望するようになってくるわけだと思ひます。我々のふるさと山崎もその例外ではあり得ないのでありまして、町内の文化団体が今後更に一層町民の方々の文化要求に応える様な活動をされることでありましよう。又、その機会に際し、此の小冊子が、山崎町町民の文化活動の総合的発表機関であることを願つて止みません。

やまさき文化

★目次★

「やまさき」文化第四号発刊に際して

壺阪 壽 2

いまいずこ 浅田耕三 3

京都懐古(随想) 根岸元彦 7

ドラスで会った男 安井道夫 9

「各部寄稿」 さつき祭を省みて 橋本一郎 11

三冊の歌集 「新樹」紹介 松本富治 12

「落葉の節」所感 稲村幸子 12

香塵集を読む 藤村省三 13

各地短歌祭入賞入選歌 福田泊水 14

第四回山崎町俳句大会 事務局 15

事務局だより 横江敏夫 16

文化と美術協会 高野圭介 16

女性の囲碁 朱山 毅 17

佛教と文化 河崎よし子 17

日本舞踊とのであい 藤多克己 18

世阿弥の著述から 下村宗節 18

温故知新 猪尾睦夫 19

一の宮の三つ山祭 北川泰子 19

タラの芽 福井久夫 20

若西神社の獅子舞と稽古 久保寅夫 20

山崎町の史跡(その二) 田口 実 21

吟道と私 片山澄之 21

心に響く合唱を求めて 後藤一孝 22

世はまさに生涯学習時代 根岸元彦 22

編集後記

表紙 攝保川・十二ン波／横江柏峰
表紙題字／尾崎正一・カット／横江柏峰

い
ま
い
ず
こ

山崎文学会 浅田耕三

ら

「亀に帰巢本能はあるだろうか」
昼食後、竹田将一は隣の今年赴任して
きた若い教師と雑談していた。

「亀の帰巢本能？」

生物担当のその教師はとまどつた顔で、

「亀って、海亀ですか」

「いや石亀。この辺の池や川におるやつ」

「——さあ」眼鏡の奥の目をせわしくま
たたかせた。

「きいた事ありませんねえ、石亀の帰巢
本能なんて。何かに出てましたか」

「いや、そうじゃないけどね」

「——でしょうねえ。亀にそんな本能は
ないはずですから」

「けど、戻ってきた」

「はあ？」

「石亀が一匹、もう何十年もうちの池に
棲みついでいてね。一度大川へ放してや
つたけど、ちゃんとまた池にもどってき
た」

「ほんとうですか」

「うん。そやから亀にそんな能力がある
ものかと思つてね」

「たしかにその亀ですか」

「そう。ちゃんとしるしをつけていたか

「くわしくきかせてもらえませんか、そ
の話」

「詳しいも何も、それだけの話や。山裾
の池で捕まえて大川へ放したのが、又池
へ戻ってきてそのまま棲みついて、さあ
もう何年になるやろ。なにしろ子供の頃
の事やから、ぼくがまだ」

「へええ——」相手は目を丸くした。

今年三年振りに、松尾台の田に将一は
稲を作つた。松尾台は彼の家から一軒ば
かり南にくだった大川を挟んで、家とは
反対側の山裾にある台地である。

父祖伝来の水田がそこに五十アールば
かりあつて、そのうち三分の一はずつと
以前から、梅もどきやピラカンサスなど
の花木を植えている。残りは休耕田にし
てこの三年間、小豆や大豆を作つてきた
が、今年また稲にした。

夏、その除草をしていると、やつこ
さんやつぱりいた。

ああ、お前いたか今年も——。仕事の
手を止めてそつと近づくと、彼は繁茂した
稲をゆつくりと押し分けていた。池から
田へ出てきているのだ。

三年ぶりやなあ、どう、達者やつた？
こうらの長さがもう二十五センチ程もあ
るそいつを竹田は両手でつかみ上げて顔
をのぞいた。つかまれると顔をひっこめ
るが、すぐにまた出してもそもそ四肢
をおよがす。

畦まで歩いて草の上に仰向けた。
暗灰色の腹のこうらが夏の陽をはねる。
彫られた線が、まさしく亀トのように縦
横にはしっているが、とてももう文字と
は見えない。

台地の一番奥、赤松の林を背にして池
がある。奥行十メートル、堤が三十メー
トル程の小さい長方形の、この台地専用
の灌漑用溜池である。だから水量調節の
水門も、水抜きの子もちゃんとついで
いて、田といつしよに将一が祖先から
受けついでものだ。亀はそこに棲んでい
る。

昭和十五年、将一が小学校の五年生の
春、ずい分もう古い話だ。五年生とはつ
きりしているのは池からの帰り、下の道
で担任の小林先生に出会つたのを憶えて
いるからである。

将一はそこで鯉に餌を投げていた。鯉
の世話は将一の仕事だった。

甘藍についた青虫をとってマッチの大
きい空箱に入れ、自転車まで下の道まで
きて二、三匹ずつ指先につまんで土堤から

投げる。真鯉ばかりだが二十四ぐらいも
いたろうか。

出征の出立に縁起がよいからと四、五
十センチもの鯉を池からあげて、父はよ
く頼まれた家の祝膳に届けていた。水に
濡らした半紙を両眼にはると鯉はもうび
くりともしない。そいつを大皿にのせて
宴に出し、終わるとまた池にもどした。

水に放すと鯉は何事もなかつたように悠
々と泳ぐ。

春の雨を溜めて薄濁つた池の表面にゆ
つくり波紋がひろがり、背が水面に現れ
る。箱の底にもぞもぞ動いていた四、五
十匹の虫はすぐになくなつた。

将一は堤を下りかけて、ふと水門の所
に石亀が一匹いるのをみつけた。大人の
手のひら程のやつだ。片手につかんで首
と足をひつ込めたのを仰向けにして草の
上に置いた。

亀は裏返すと四肢を動かし懸命にもが
く。その格好がおもしろいので将一はち
は亀をみつけるとすぐそのいたずらをや
つた。

くろぐろとはびこつたクローバの上に
裏返されたその甲に目を止めて将一はび
つくりした。

「何や、これ」

甲らが傷まみれだった。

岩でも傷つけたか、それとも何かに
襲われたかと目を近づけると、どうやら

それが文字、漢字四文字で、たしかに竹田良一とよめる。切出しのような鋭い刃物の先で彫りつけているのだ。

兄さん、思わず唸った。空しく宙を掻く四肢の間で縦二列の四文字が生きて動いている。

「ほう、そんな事をしottaか、良一は」
夕方、麦畑の手入れから戻った父に、
将一はその話をした。

「生き物をむやみに傷つけたりして罰当たりな奴や。まして亀は一番目出度いき物やというのに」
目をしばたいた。

「それでどうした、その亀は」

「うん、池の中へ入れといてやった」

「そうか」父はしばらく黙っていたがやがてまたぼつんと、

「今度またみつけたら持って帰ってわたしに見せてくれ」

そして将一はその年の夏、またその亀にめぐり合ったのである。亀は蜂の子のコンクリートの上に、まるで置物のように、こうらを干していた。一目みて将一は、ああ、あいつや、と思った。近寄ると急に亀は動いた。意外な敏捷さでぼと



んと水に落ちた。水際を走って将一はやつと掴んだ。

裏返すとやはり兄の名があった。将一は餌の米糠を入れてきたバケツに亀を入れて家へ帰った。

「ほう、これか」

井戸と堀の間の松の木陰においたバケツの中で、ごそごそ音をたてている亀をわし掴みにして、父は腹の甲をのぞいた。

「なるほど、彫るとるな、あいつ」
つくづくながめて

「いつこんな事やったのやろ」

「兵隊さんに行く前や」

将一には確信があった。

「うん、傷が新しいからな。お前のいう通りだろう」

父はなおもながめていたが、やがて台所の戸棚から酒を持つてくるように将一にいつつけた。

将一が一升瓶と湯のみを持ってくると

父は沓脱石の上へ亀を置き、おそるおそる出しかけた亀の首の前へそと湯のみの酒をもつていった。けれど亀は飲まない。いろいろとやってみたが、やはり駄目であった。

「どうしても飲まんか」がっかりした父は、亀を入れたバケツの中へ湯のみの酒を注いだ。

亀が酒を飲むという俗説を父は信じていたのだろう。父は酒をほとんど飲まな

かったが、兄は出征前、灘の酒屋に奉公していたせいか、酒が好きだった。

前年の昭和十五年七月二十日、兄の竹田良一は中国山西省の臨汾から汾河を渡

って、二里ばかり西方の、連枝山脈の麓の劉村という所に駐屯中、敵の襲撃をうけて戦死していた。

その三ヵ月後の十月末、同じ部隊で戦友だった隣の三日月町出身の森上という兵長さんが、華北の戦場からわざわざ兄の遺骨を抱いて帰国して下さった。

その頃は中国派遣の日本軍も、緒戦時の多忙さが一段落して戦友の遺骨を届けに、兵士を一時帰国させる程余裕があったらしい。

兄の遺骨を迎えて村では盛大な村葬が小学校の校庭で営まれた。小学生、青年団、婦人会、在郷軍人会など、全村民がみな街道に並んで英霊の凱旋を出迎え、葬儀には県知事代理や姫路師団の陸軍中佐、それに村長さんなど偉い人が参列しかわるがわる兄の霊前で弔辞をよんだ。

風の強い日で式の間中、幔幕が揺れた。遺族席に並んでいた将一は、小学生が、「英霊に捧げる歌」をうたう時、立って一緒に歌った。はたはたと風に鳴る幔幕の音に負けるものかと声を張りあげてうたった。

山抜く力 いまいずこ

ああ ああ いまいずこ
声といっしょに涙があふれた。

「竹田君はほんとに勇敢で立派な軍人でした」

通夜の席で森上さんがそう前置きしてこんな話をした。もう夜も大分更けていて席に残っているのは、親類と親しい近所の人達だけだった。

ある日の午後、敵の一部隊が劉村から数軒離れた場所に現れたという知らせが入った。兄の守備隊はすぐに討伐に出た。それを逸早く察知して移動していた敵と高粱畑の中で遭遇した。

夢中で戦闘しているうちに兄は突然、畑の中の穴へ落ちてしまった。穴の底には黍殻のようなものが少し溜っていて怪我はなかったが、深さは二メートル以上もある上、穴の格好がちょうど壺のように口がせまく、内がひろがっているからさっぱり上がる手がかりがない。

あせつてあれこれやっている、どんと音がして、又一人落ちてきた。落ちた時そいつが悲鳴を挙げたが、それを聞いた一瞬、兄は中国兵とさotta。咄嗟に帯剣を抜き、倒れている奴の胸元につきつけた。けれど仰向いたその顔はまだほんの十五、六の子供、あどけない丸顔だった。いささか拍子抜けしたけれど、油断はできない。

起てツと兄はいった。少年の中国兵は半身を起こした。顔をしかめて右足の膝を押さえた。枯葉色のズボンに赤く血が滲んでいる。

「怪我したのか」

兄はたずね、ズボンの裾をあげてみる

と仕種で示した。膝頭に擦過傷があった。銃創ではなく石の角でもきつたような傷だが、皮が破れてかなりひどい。少年は懸命に何か訴えた。中味は少しもわからぬけれど、ひどく稚い瘡高い声だ。いいながらその頬を涙が一筋、顔が汚れているので黒い汁になった。流れたあとに桜色の皮膚が見えた。

「私はそれを見た時、まだ小学生の弟を思い出して、その少年兵がひどく可哀想になりましてねえ」

あとで兄は森上班長にそう述べ懐したという。

「よしっ待っていろ」

兄はいい、雑裏から三角巾に包帯、ガ一ゼ、傷薬をとり出して応急の手当をしてやった。

少年の目に安堵の色がうかび、何度も叩頭した。

「立ってみろ」仕種で示すと少年は立った。「痛いか」ときくと、問の意味がすぐわかったらしく首を横に振った。

狭い穴の底で兄が四股を踏むように大

地を踏んでみせるとまねる。よしっ兄は頷き、少年を肩車にした。穴の上をさぐらせる。届かない。肩の上に足をおかせると、やっと何かの手がかりをつかんだらしく急に肩が軽くなった。少年は消えた。

兄は穴の底に残された。ぼっかりあいた頭上にまたたきはじめた星が見えた。寝ころんで空を仰いだ。こんなにゆつくり空を眺めたのは何年ぶりだろうと思つた。三十分ぐらいたつた頃、ばたばたと足音がして荒い息づかいと一緒に、長い棒が上からさし込まれてきた。少年がどこからか持つてきたのであつた。

戦闘は終わっていた。

「おれについてごんか」

身ぶりで示すと、少年はうなづいた。

「若い中国兵を連れて竹田君はあとから帰隊しました。戦闘中に敵兵の怪我を治療してやるなんて気が優しいだけでできるものじゃないのです。こんな人物がほんとに沈着で勇気があるんですよ」

「その捕虜はどうしました」

親類の一人がきいた。

「元気で今も衛生兵の手伝いをやっています。なかなか利口者で、日本語の上達がびつくりする程早く、われわれに支那語を教えてくれるんです。よくなつて殊に竹田君を兄のように慕っていますねえ。戦死と知った時は二日ぐらい食

事もしませんでした」

「良一はやさしい子やったからなあ」

誰かがいうと、将一の母がこらえ切れずに泣いた。

「大川へ逃してやろうか、将一」

父がいった。

「あんな小さい池に一生閉じ込めておくのは可哀想やないか。山の下には水のきれいな大きな川が流れとるのにそれを知らんや。放してやろう」

うん、と将一はいった。少し寂しい気がしたけれど、父のいう通り水がどろんどろんとたまった古池で一生を終えさせるのはあわれであつた。

翌朝、二人はバケツに入れた亀を大川の岸辺で放した。

その亀を将一がみたび池でみつけたのはあくる年のまた春であつた。

米ぬかに蚕のさなぎの粉末を混ぜダンゴにしたのをふりまいてみると、堤の赤土の斜面を亀はゆつくり這っていた。

将一ははっとした。たしかに去年、父と二人で大川に放したあの亀であつた。

ひつくり返してみると、やはり兄のかたみの傷がある。

あの川からどうしてこの池の場所がわかつたのだろ。将一は不思議でならなかつた。日名倉や三室など中国山脈の高峯を源にした豊かな水量の川は、この辺で

は激しく岩をかむ急流である。

「そうか、戻ったか。やつぱりな」

将一の話を書くと父は節くれだった大きな手を組んで大きく二三度頷いた。

以来、将一は松尾台のこの池か、まわりの田で何度この亀と出会つてきた。

つき合いはもう何年になる事だろう。子供だった彼は青年になり結婚し、子供が生まれその子ももう二十歳を越えた。亀には一年に二、三度も出会う事があるし三年も見ぬ事もある。

亀がどうしてはば三百メートル東のはるか下の谷を流れる川から池をさがしてあててのぼつてきたのか――。

将一は周囲に、生物の生態に関する何かの話がでると、ふと思いついて誰彼となくこの質問をこころみ、経験を話す。

ただし、兄の名がこうらに彫りつけられた亀とはいわない。

「亀にそんな力はないでしょうね」

たいてい、信じられんという顔をする。

将一はあえていう。

「けれど鳩は元の巣へ帰るでしょう」

「そりや鳩の帰巢本能は誰でも知っていますよ。けど石亀の帰巢本能なんてきいたことありませんからね」

なかには「偶然じゃないですか。川岸から這い上がった所に、元の池があつたんですよ」という者

「鮭は外洋を回遊して生まれ故郷の川へ戻りますね。あの回帰本能は生まれ故郷の川水に含まれる成分を嗅ぎ分ける特有の器官が鮭にあつて、それで帰るんですけど、石亀にもそういうものがあると思えますよ」

まれにはそんなうがった意見にも出くわす。

「しかし亀を放したのは池より一軒余りも川上ですよ。そこに放した亀が下流へ流れ込む池の水の成分を嗅ぎ分けられますかねえ」

「反論すると」「それもそうですかねえ」
急に曖昧な顔になった。

亀が戻ったのは兄の彫りつけた名のせいであろう。亀には兄の思いがこもっているのだ。そうでなくて、この狭い山裾の池に、どうして何十年も棲みつこう。子供の頃には思い及ばなかったけれど永年亀とつき合ってきたて将一の胸には動かぬものが生まれた。そうか、やっぱりといって深く領いた父の年齢に近づき、それを越えて、確信はさらに深くなっている。けれど父とは違う。日蓮宗に深く帰依していた父は、遠い異国に果てたわが子とのもっと深い魂のつながりをみつめていたのかも知れない。そんな深みは将一にはない。けれど亀はやはり戻るべくして戻った、と思うのである。

たった二人の兄弟だったけれど兄とは十三違う。兄が死んだ時、将一はまだ九つだった。

入営するまで兄は灘の酒屋へ奉公に行っていたが、病身の母の希望もあつて入営の三カ月前に奉公先をやめて帰つてきた。父の百姓仕事の手伝いに精出し、年齢離れた将一を可愛がつてくれた。

一度兄は町の映画館へ将一を連れていってくれた。嬉しかった。映画といえは年に二度ほど、小学校の校庭でみるぐらいだったから。その題名も内容も今ももうすっかり忘れてしまったけれど、わずかに憶えているのは、中国戦線の石ころばかりの山道を進軍していく日本軍が途中で休んで飯盒の飯を食べる場面である。一人の兵隊が瓶びんに入れた味噌を配つて歩くと、配られた一人がしみじみ、ああ、たくあんが食いてえ、と呟く。将一はたくあんの何たるかを知らなかった。村では大根漬はお香こ香こという。

「たくあんて何」と将一は兄にきいた。まわりがわつと笑った。それでその場面を憶えているのだらう。

映画がおわつてうどん屋へ入った。食事がすむと、バスで帰れと兄は言った。

「兄さんは？」

「まだちょっと用事がある」

「そんならばくもいく」
いや帰れ、ちゃんとバスに乗せてやる

から、と兄はいったが、将一はきかなかつた。兄は苦笑してそんならついでくるか、といつてどんどん道歩いた。

町の北側に小高い丘があつて丘の麓には寺が並んでいる。寺の間を通過つて兄は坂道を上がつていった。将一は黙つてあとにつづいた。九十九折の緩い坂道を登つていくと畳一畳ぐらいの大きな碑が建つていて、碑の横の檜の木のそばに水色のワンピースを着て日傘を持った若い女の人がいた。兄がその人に低い声で何かいった。いいえ、と女の人はこたえ、笑顔で将一の方へ向け、弟さん？ときいた。将一は何となく赤くなり、こくりと頷いた。

三人は葉桜の下を歩き、丘の中腹の小さな寺の藤棚の下のベンチに腰を下ろした。そこからは町の家並みが一望できた。一週間に二度、兄は母の薬を診療所にとりにいく。その人はその看護婦で将一達と同じ村の出身だった。小学校が兄の二級下らしく、そんな事を彼は二人のやりとりから知った。

将一はすぐに退屈して寺の東側に回つた。人気がない所にブランコがあつた。一人で漕いでいると、急に目が痛くなつた。ゴミが入つたらしいがこすつてもとれない。片目をおさえて兄の所へいった。

「いいわ、とつてあげる」

その人がしゃがんで指先で将一のまぶ

たを軽くつまんでくるつとむき、白いハンカチをあててくれた。化粧のよい匂いがした。将一の肩においた手がひどくあたたかい。

「父さんにはいいうなよ」

バス停まで来て兄がいった。うんと将一は頷いた。バスに揺られながら、さっきのやさしい指先の感覚が彼の脳裏にいつまでも残つた。

○
亀のこうらの文字を初めて見た時、竹田良一の字の下に別の線があるのに将一は気づいた。かな文字らしかったが読めない。多分町で会つたあの女の人の名だろうと思つた。けれど将一はその名を知らない。あの時兄がどうよんでいたのかまるでおぼえがなかった。

父と二人で亀を川に放した時、将一は死んだ兄との約束を考えてどうしようかと大分迷つたが、結局父にそのことを話した。

「これがその人の名かも知れん」

「そうか」父はそういつて甲に眼を凝らしたがやはり読めなかった。

「葬式にその人は来てくれとつたか」

「いや見なんだ」

「遺骨迎えにも？」「うん」

「お前、顔忘れとるのと違うか？」

「ううん、よう憶えとる」

「ううん、父は肩を落とした。」

「けど、あの人が誰かは分かるよ」

「どうして」

「この村の出で、小学校が兄さんの二級下の人や、三河の診療所の看護婦さんやもん」

「なんや、そんなに詳しいこと聞いたのか」

三日程して父は外出から帰ってきて、「わかったぞ。小野けいさんというてな。良一の戦死の公報が入ってひと月後に従軍看護婦を志願して、今は中支におられるそうや。葬式にも来れなんだ筈や」

父の顔ははればれしていた。

「そんならあれはひらがなのけいだったのやな」

三度目に亀とめぐり合った翌年の四月に将一がたしかめると、けの字の左の棒が消えているのだった。

今はこうらの文字も半分消えている。けいさんのほうはあとかたもない。

小野けいさんは、中支で爆撃に遭って亡くなられていた事が、戦後わかった。

兄さんもけいさんも亡くなってもう久しいけれど、亀は生きている。亀は家名に通じて縁起のよい生き物だという。万年の寿命はあるまいが長生きする動物であると、将一はつくづく思う。

今年久し振りにみた亀の背の甲は、少し黄味を帯びてきていた。

随想 京都懐古

山崎文学会

根岸元彦

京の火車

私は戦前、浪人の予備校生として半年余り、戦後は、学徒出陣の第一回目に入隊し、終戦によって又再び大学生に復帰してから二年半、通算して三年余りを京都で暮らした。その間、私の印象に残っている火事が四件ある。

一つは三高の学生寮が焼けた時、次は京大の学生集会所の火事、もう一つは金閣寺が放火された時、最後は京都駅の火事である。この中で私が目撃したのは、学生集会所の火事だけだった。

三高の寮が焼けたのを知ったのは、私が帰省していた時で、新聞で読んだのだと思う。そのすぐ後で京へ帰った時、下宿へ戻る前に、友人を訪ねておく用事を思い出した。百万遍で市電を降りて裏門から大学へ入り、正門の方へ通り抜けた。

友人の下宿は東山の方にあつた。

京大の正門と三高の正門とは、吉田神社に通ずる参道に向かい合っている。三高の正門に打ちつけてある有名な、カマボコ板のような標札、この標札は「第三高等学校」と、小さな板に窮屈そうに書かれてある。何度掲げてみても、何時の間にか誰かが持っていってしまうので、とうとう学校も根負けがして、いくら盗まれてもいのように、小さな板切れに書いて、正門の柱に釘で打ちつけてしまつたという、いわく付きの標札である。どうせ学生か受験生が、卒業記念か合格祈願のお守りにと、失敬してしまうのだから、これを眺めると、ふと寮が焼けたことを思い出した。まだ時間も早かつたので、焼け跡を見て置く気になつた。

旧制三高は、今では京大の吉田分校とかなつていそうだが、今でもその屋上には三高時代、「自由の鐘」と呼ばれた鐘がかかっているはずである。この鐘は何時か鳴らされることもあるのか知らないが、私は一度も聞いたことがない。

寮は校舎の裏手になつてゐる。私はかつて一度だけ、この寮を訪れたことがある。私が戦前浪人して、京都で予備校通いをしてゐた頃、この寮にいた、中学時代友人だった三高生に、会いに行つたのである。その頃の受験生にとつて、天下の秀才が集る三高生の、三條の白線帽と

は、畏怖と羨望の的であつた。そして旧制高校の寮生活や「紅燃ゆる」の寮歌の調べは、浪人にとってはメルヘンの世界であり、夢の国とも言えた。

私はまるでルンペンが、金殿玉樓に足をふみ入れたように胸をときめかせながら、おずおずと寮の玄関に立つたものだ。玄関脇の小使室で案内を乞うと、すぐ友人が出てきてくれた。小使室の火鉢にあたりながら、色々と話したことであつた。当時の旧制高校の寮は完全な自治制で、外来者はふだん、親兄弟ともいえども寮内に入ることは許されなかつた。学校の教授でも寮委員に断つてでなければ、入ることが出来なかつた程である。ただ一年に一回、寮の記念祭の日だけ一般に開放される。その日は寮の各部屋は、その部屋の住人達の手によつて、思い思いのデコレーションがほどこされ、奇抜な飾り付けでそのアイデアを競つた。そんな風だから、旧制高校の寮とは当時の受験生には、神秘のヴェールに包まれたものだったのである。

永年の伝統に培われた数々の行事や寮歌、これは毎年の記念祭ごとに、寮生一般から募集されるのだが、沢山の寮歌の中から代表的な歌が、後世まで唄い継がれる。その他寮の七不思議として語られる怪談。「勝ちやいいんだらう」「勝つた方がええ」と称して、ルールも何も無



視して、無茶苦茶な競技で行われる対寮マツチ。その後の「祝勝コンパ」も「残念コンパ」最後は深夜に、酒に酔った寮生が廊下や各部室を赤フン一丁、下駄ばきのままで荒れ狂うストーム等、又、部屋中所狭しと書きなぐられた先輩達の落書きが天井板にまで及んで、一種別世界の雰囲気醸し出していたのである。

私はこの三高生の友人に、こんな寮生活の四方山話や、受験勉強の方法などを聞き、新しい意気を鼓舞されて「何葉、来年こそ俺だって、石に噛りついて」と決心しながら帰っていったことだった。私がこの焼け跡を眺める気になったのも、当時のいじらしいほどみじめな浪人生活に、一筋の光芒を与えてくれた思い出とは、友人をこの寮に訪れてはげまされた時の、あの希望に満ちた瞬間であったと思ひ出して、そんな昔を懐んでみる感傷からだったようである。

寮の焼け跡へ行ってみると、二階は全く焼け落ちて、階下の部屋も真黒に焼けこげた壁、斜に垂れ下った梁や棟木と共に、惨澹とした光景を呈していた。自由の旗じるしの下に、歴史と伝統を誇って

いた三高の寮も、今は白日の下に、みじめな残骸をさらすのみとなっていたのである。

私はこの焼け跡に立って、「つわものどもが夢のあと」と詠んだ芭蕉の心思った。丁度占領軍によって学制改革が大きく取り上げられ、六三三制の新教育で、学校制度も大きな転換がなされている最中であつた。

私は旧制帝大最後の学生として、自分の位置を改めて自みる気持だった。焼け跡に立った私は、三高自治寮の焼失が、何か旧教育の末路を、象徴する姿のように思えてきたのである。

事物が発展したり変革する過程とは、理論的に言つて、正、反、合の辯證法的経過を辿るのが正しいあり方と、当時の私は考えていたのだが、終戦直後の教育改革は、まるでそんな論理を無視して、いわば木に竹を継いだような、今日までの日本の歴史も民族通念も、全称否定してしまふやり方であると思つた。勿論これはこと教育だけに限らず、戦後進駐軍のやり方は、日本の社会変革や民族意識の改革の意図があつたことだから、あらゆる面で大なり小なりこの傾向があるのだが、戦前の日本のあり方をテーゼとして位置づけ、それに対立し否定する、アンチテーゼとしての論理的構想ではなしに、全く突然にすべてを破壊し、無視

し、理論を度外視して、暴力的であつたと言つても、過言ではないと思われる。

こんな思いで眺めると、この焼け跡の残骸に、破壊された日本の教育の姿を、目の前に見るような感慨があつた。「つわものどもが夢のあと」と口の中でつぶやきながら私は、目をつぶつて、自分達がかつて受けた教育の、夢のあとを追つた。

日本の教育思想は、こんなにまでみじめに、破壊されねばならぬ底のものであつたのだろうか。私達の育つた大正リベラリズムの世界観を省みれば、それは確かに自我主義的な個人主義、自由主義思想ではあつた。その上に白樺派流の甘美なヒューマニズムを盛り合わせた、教養主義といつてもよく、その上おのずから明治時代より引きついで、官僚的出世主義の尾も引いていた。

しかし昭和期に入つて、これは軍部の嫌う所となり、無理矢理に国家主義の全体主義の方向へ、ねじ向けられた面があつた。けれどもこれは、単にイデオロギーの問題なのであつて、思想と言へるものではない。政治や経済、又は社会生活は軍国主義で引っぱつてゆけても、教育思想まで改変出来るものではない。イデオロギーは直ぐにでも変えられるが、思想とは変わつてゆくものであつて、無理に変えることなど出来るものでないのだ。

私は、私の人間形成を担つた大正リベラリズムの思想は、民主主義の思想そのものだと思ふのだが、それを追憶するうちに、わたしは甘美な夢の世界に包まれてゆく。

「夢」理想主義を象徴するこの言葉は、当時の若者を決定的に色づけた合言葉であつた。今は亡き私の親友が、教育界に入るに當つて私に寄せた書信の中に、「敗戦後の今日ほど、青年にとつて大きな夢の必要な時代は無いと思う。新教育の名によつて寸断された教育課程の中に生徒は、その夢まで寸断されようとしてゐる。俺は片々たる知識の集積で、小利口に完成された若者を作るより、むしろ未完成の大馬鹿を育てようと思う」と書いて来た。彼は不幸にして、業半ばで夭折したが、彼の育てた少年の中には、必ず雄大な夢を抱いた、未完の利器が育つてゐるにちがいないと、私は信じてゐる。私も思ひは彼と同じであつた。教職を聖職と信じ、青少年に夢を託すの想いで、教育界に身を投じたことを、私は思ひ出すのである。

今や戦後の教育を根本的に見直し、新たな角度で教育改革がなされようとしてゐる。この際、一老退職教師の繰り言としてでなしに、教育とは一体何かを問い直してみることも、必要ではなからうかと思ふのである。

ラダツク地方は、レーの大オアシスやインダス河添いの灌漑地を除き、殆どが大小無数の石ころだらけの原野の拡がり、不要なものをすべてを振るい落としてしまった山膚には、ねぎ坊主のような土色のアザミ類が点々と生える程度で、ほかに一木一草のかけもない。ただ奇怪な岩肌の色と形がおたがいを競い合っているだけの風景である。

そんな荒野の岩山の上や谷添いの切り立った山裾にゴンバ(ラマ教寺院)があつて、薄明の室内に入れば突然の冷気にジーンと耳鳴りがして見知らぬ世界に闖入した戦慄を覚えるのである。

天井からは華麗な幢幡や柱飾りが吊り下り、壁面では忿怒尊たちの原色が乱舞する。

夢の風景が色彩を持たないように、私たちの眼差しの裏側には常に灰色の世界があつて、それがすべての基調となりもののかげとなつて事物に寄り添っているというのなら、ラダツクの自然は一つの原因風景といえそうである。

私たちは、さまざまな忘れ得ぬ体験を

胸に早朝レーの街を発ち、フィヤン・ゴンバに立寄つた後、ラマウルへの上り口でインダス本流と別れ、夜半カルギルに到着、そこに宿泊した。

すでに土造民家の屋上ごとにタルチヨ(白布)はためくラマ教圏を抜け出て、道行くひとの帽子一つにもイスマム文化圏の様相が見てとれた。

スリナガールへ帰り着く日も、雲一つない快晴であつた。

カルギルを発つて、典型的な氷河河床のドラス谷地に入るとヒマラヤも近く、背後の山々にはところどころ万年雪や氷河が顔を見せはじめた。

ドラスで休憩。私たちはツーリスト・ハウスで紅茶を飲んでいたら、ここで長居するとインド軍の輸送車の群れと交錯して立往生するかも分らないという運転手の危惧に、早々に車に引き返そうとした矢先、その男が現われた。

男はヒッピー風の紅色の衣のような服をひらひらさせ、小さな子供を抱いている。一瞬、私はレーの街角で出会つた男を思い出す。

裏町の狭い露地にも観光客相手の小さ

な店が並び、ロータリーから旧王宮へ抜ける石畳の角の店に、同行の若いMがひとり買い物をしていた。

ちやうど指輪にできる大きさで色も濃く澄んで鮮やかなトルコ石が、少女の白い手のひらに置かれていた。こんな原石でなく、指輪となつた製品がほしい。それもこのレーの空のように深く澄んだ色でないと駄目なの。少女はそう言いたいのであるが、売り手の男には通じない。手振り身振りの片言混じりで悪戦苦闘。

私もそれに協力して、何とかMの意思を通じさせようとした時、後ろから、「あら、面白い物している」と日本語が聞こえてきた。振り向くと髭を生やした男がちよつと立ち止まり、連れの女が乳母車を押して歩いて行く。ズボンも服も薄もので、夫婦らしく揃いの紅色である。

レーの街中ではいささか派手だが、インドに在住している旅慣れた態度とも見とれる。

「ああ、いいところで日本人に会つたわ。あの人に通訳してもらおう」。そうMが言つたとき、男は女の後を追つて逃げるように遠ざかつて行った。

ドラスで男は最初に私に声を掛けてきた。「ガイドの方はどなたですか? 同乗させてもらいたいのですが」。さらに、「私とこの子と、妻との三人です。トラックの上に乗つてここまで来たのですが、え

らくって、えらくって」という。

私は彼ら家族がバスの中に乗り込んできた時も、レーで会つた男に違いないと思つた。女はやはり男と揃いの紅色の服を着、非常に若くアリヤン系の顔だちをしている。子供の頭髮は柔らかな薄茶色であつた。

女は乗り込むとすぐに、バスの天井の真ん中に通っている手摺の鉄管に、生乾きの洗濯物を下げはじめ、それは幅広い黄色のタオル地で、私の反対側の窓の視界を無惨にも遮断してしまつた。

バスの中では同行の娘たちが、飴やクッキーなどの菓子類を次々と後ろへ回してくれた。もう間違ひなく今日のうちにスリナガールへ出られるのだから、安心して非常食の放出が始まつたものと思われる。

その都度、私は横に居る彼ら家族にも同じように送つてやつた。「日本のお菓子、なつかしいね」と女はいう。

男がどのような職業をもち、何のためにこれほどの辺境の地に乳幼児を連れてまでやつて来たのか。私は色んな想像をし、聞き出したい衝動にかられたが、そのうち打ち解ければまた何かと聞き出すこともできようと、あまり彼らを注視せず、再び褐色一色から徐々に緑を増していくヒマラヤ越えの景観撮影に専念して

いた。

往きと同じソナマルグで遅い昼食をとったとき、土産物店の庭先で子供と遊ぶ家族と出会い、その男から彼らがボンベイに六ヶ月滞在していたこと、ラダックではその自然の非常さに圧倒されたということなどを聞いた。

「その子供さん、いくつ？」レーマで行って大丈夫でしたか？と私。「一年五ヶ月です。四、五日は大変でした。アツブアツするほど大きな息をして一時はどうなるかと心配しました」と彼。「そうでしょう。チベットでは外から連れて来た子は育たないと言いますからね」私がそんな話をすると、男ははじめて興味深げに聞き返した。

「妊婦が高地へ来ても流産することが多いということですし、チベット人でさえしばらく低地で生活すると帰って一ヶ月ぐらい具合が悪いと言いますからね」私はそのようなことも話した。

バスはカシミール盆地の水稲地帯に向ってどんどん下って行った。松、杉などの森林帯の緑の上に真っ白な氷河があり、もっと下れば桑畑や桃、アプリコット、アーモンドなどの果樹の間にヘギ板葺の農家が点在するようになる。

スリナガルで、男はナギン湖畔で降りるといふ。運転手は道路事情に詳しいのか、往きに通った雑沓の大通りでなく

車一台なんとか通れる露地をぬけ、木彫の美しい窓をもった旧い家並みの中を走り、山上にムガル王朝の砦跡を見ながら相当回り道をして、ムスリム集団墓地の前でようやく車を停めた。

彼らは沢山の荷物を持って車を降りた。家族の姿に安堵の気分が感じられた。

地球の内臓をえぐり出したかと思われほどの凄惨な黄色の岩肌、ときには垂直に切り立ったインダス渓谷の向こうに、数知れぬ灰色のチオルテン（仏塔）群がみえる。しかも、砂礫の舞う二つの峠を寒気も気にしておれないほどの揺れに身を守りながら、トラックの荷台にしがみ付いている親子の姿が目につく。

その親子が偶然のことから私たちの車を見つければ、ドラスからスリナガルまでの五、六時間一緒に過ごした勘定になる。男は道路より一段高くなった墓所の敷地に背負子を置き、つくばうようにして荷物を肩に担いだ。目は伏せたままバスの後ろへ回って無言で姿を消してしまつた。

彼らの起った座席は、幾人かの悪童たちが騒いで立ち去った後のように、鉛の皮など種々のゴミが汚なく散らかったままで、ビニールの袋に入った哺乳瓶が座席の下に転っていた。

「これ忘れていたのではないですか」と私が言うと、もう捨てて行こうと思つて

いたものかも知れないが、地面に降り切つていた女はそれを受け取った。

男が歩き出した後ろで、女はこちらに向つて、「ありがとうございます」と二度言った。

バスは動き始めた。「お大事に！」と私は女に手を振つた。

スリナガルで私たちはシカラという小舟に分乗、焼けるような夕靄のダル湖を対岸のハウスボートに向つた。

今朝方までいた激しい自然と、このいま見る波のない静か過ぎる湖面との対比が、ヒマラヤという一つの山脈によって、かくも截然と形成されていることが実に不思議なことと思われるのである。

同じ大きさのシカラが後から後からやってくる。物売りにはちよつと強引すぎる執拗さでつきまとう。

子供がいるかと思うと、インド商人の典型といった口髭のある太った男が小舟の上でカシミヤの店開きをする。

私は空気にさえ湿つた粘着力を感じるようになっていた。

デリーの夜、食堂に私たち一行が会したとき、たまたまバスに乗り込んだ夫夫婦に話題が移っていった。

女が日本人であるかどうか？あの顔つきで見ると、日本語がうますぎるから絶対日本人ですよ、という意見が大勢

を占めた。

では、子供が純血でないのは何故？

旅行最後の夜とあって、もうお互い遠慮もなく、話題は沸騰した。しかし、あの男について同情的な意見はついに聞けなかつた。

私には思い当ることがあつた。ボンベイに六ヶ月滞在したのは、ラジニシのアシユラムではなかつたか。そう思えば、紅色のワンピースについての疑問も消え去つてしまう。

私は彼らが、そのアシユラムでどのような宗教体験をし、性体験をしたかは知るよしもないが、逃げるように消えた寂しい男の後ろ姿が、いまだに気に掛つて



さつき祭を省みて

播磨さつき会

橋本 一郎

山崎町は昭和四十三年に町のシンボルとして「さつき」を町花に選定し、毎年六月の第一日曜日を中に前後三日間、全町を挙げて「さつき祭」が催され、最近では展示品も三〇〇鉢を超えるまでに成長して参りましたことは誠に喜ばしいこととであります。ところが残念なことは観賞者数が年々減少となり、四、五年前には二十数万人の園芸マニアや観光客で賑わった「さつき祭」も、最近では四万人程度（約五分の一）の外来者数では、将来への期待も望み薄の感がいたします。

さて、何故このような現象が生じたのか一般者の意見を総合すると、まず、さつき栽培が急激に普及され、生産量においても過剰の傾向にありますので、数奇者にとつても容易にさつきを入手することが出来る。また、さつき展においても身近な場所で開催されるようになり、わざわざ遠方に出かける必要がなくなつたと言ふこととあります。

の本場「栃木県鹿沼市」は毎年七〇万人の来訪者を迎え、益々さつき祭りの人気が高まりつつある現状をみると、決して前者の理由のみではなく、むしろ山崎町としては如何に鹿沼市が「さつきの町」にふさわしい要素を備えているかをこの際、注目すべきであり、又、この点を大いに反省すべきではないでしょうか。

ところで、山崎町がどの程度のものかその内容を三、三摘出してみると、誠にお粗末と言うより外ありません。

- 一、本町には銘木が極めて少ない。その一例を掲げると次のとおりです。
- 二、本町から作出した品種がない。（約二十年生以上の盆養木を、この場合、銘木と称する）
- 三、本町特有の樹形が考案されていない。

（樹形には練馬、飛鳥、秋川模様

等、色々工夫されているが、本町には特有の模様が考案されていない）

その他不備な点は多々ありますが、一応「さつきの町」と自称するためには、是非以上の三点が達成出来ない限り幻の町花に終わるのではないのでしょうか。そうならないためには、如何にこれを実践するかが問題であり「言うは易く、行ない難し」の空論と解釈されてはと考え、私の愚案を簡単に述べることにしました。

- 一、銘木の確保は多大の経費を要するので、現在愛好者が所持しているさつきを大切にし、銘木の管理保存を図る。
- 二、五年後を目標に約五〇〇鉢の銘木を確保
- 三、新品種の作出に当っては交配技術の普及と向上に努め、五、十年後には新品種の登録制度を設ける。
- 四、（交配技術の取得には、講師を招へい）
- 五、本町特有の樹形については、前記同様五、十年後を目標に、模様木を考案する。
- 六、（さつき祭を活用し、出品及び審査を行ない、優秀な樹形をもって山崎模様を選定）

以上三点ですが、最後に望むことは、

何事によらず、すべて理想に向かって前進する場合、指導者（町当局）の勇氣ある決断が必要であり、また、これを行なう者（さつき愛好者）が目先のみの動向にとらわれることなく、常に技術の研鑽に努め、更には一般住民の理解と協力によつてこそ、山崎町の「さつき祭」も盛況をとりもどし、名実ともに立派な「さつきの町」に発展する日を期待するものであります。

山崎町文化連盟役員及び団体名

イロハ順

- 顧問 前野 四郎 小川 登
- 会長 壺阪 壽
- 副会長 和田秀男 伊藤親保 杉元清美 福山清一
- 理事 山崎美術協会
- 伊野 操二 山崎謡曲同好会
- 秦 耕三 山崎邦楽・邦舞・小唄研究会
- 尾崎 正明 粟の実会
- 谷川 道一 山崎茶華道協会
- 金井 信治 播磨さつき会
- 塚本重郎兵衛 山崎郷土芸能保存会
- 根岸 元彦 山崎文学会
- 安田 浩三 山崎茶道研修会
- 藤村 省三 山崎郷土研究会
- 藤井 慧乘 山崎合唱連盟
- 福田栄三郎 山崎俳句協会
- 高野 圭介 山崎囲碁同好会
- 三宅 宏佳 山崎将棋同好会
- 中川治衛門 昭和会
- 杉元 栄男 山崎詩舞道連盟
- 菅原 榎夫 新潮会
- 庄 清一 入江 静夫
- 監事 福山 和一
- 事務局長 長川 耕一 長尾 良彦 南 ちたか
- 事務次長 長川 耕一

三冊の歌集

山崎歌話会

「新樹」紹介 松本富治

「新樹」は藤村省三先生主宰の新樹短歌会より、結成十周年記念として発刊された合同歌集である。

凡そ歌集には大別して二種類あるが、その一つの個人の家集というものは作者のもっている人間性の種々の面が浮彫に出てくる所が面白く、第二の、合同歌集ではその構成員である人達の異った個性がちりばめられている点に魅力がある。

然し、実際には平凡で退屈な歌集が多いのが現実である。これらは短歌の原点が「自分の感動したものを人に訴える」抒情詩であるということをお忘れ、作者不在の作品になっているのが原因である。

「新樹」では、十四人の出詠者が夫々、年齢差、環境差、それに性格が違うのだから、当然といえばそれ迄だが、誠にバラエティに富んだ作品集である。だから読んでいて楽しく、次にはどんな歌がという期待がもたれ、到々、一気に読了した次第である。それは恰も万華鏡を覗く楽しさであったと言っているだろうか。

歌歴十年そこそこの言うのは、いづれも作者が躍動しているのは、藤村先生の

指導の熱意によるものと改めて感服したことであった。次に、出詠順に一人一人宛抽出する。

服ぬげばポトリと落つるパチンコ玉慌てて拾ふ子に見られつつ 新井 慶子
地下足袋に藁敷き入れて勤きてゆく夕

への冷えの早くなりし田 大谷 吉次
祖父が父がして来し火傷の治療法無視して子には子の処置があり大田 貞子

馴染客も商ふ吾も老いきたり頬紅口紅に関心する 小倉 法子
拡げ干す筵にのぼりくる蟻が小豆の虫

を転びつつ引く 小倉 松子
辨当にもつゆで卵郵便婦わがポケットにしばらく温し 日下ふさ糸

チェンソーに伐らるる樑支へもつ手をびしびしと鋸屑が打つ 栗山 節子
二十年釘秤り売る生業にわが目分量の

確かとなれり 瀧元 善子
草原の中逃れゆく難民に明日なき子らの顔もまじれり 野中 勝子

今日限り去る教壇と思ひつつ時間の足らぬ授業終りぬ 富和かず子
出役の記帳に洩れることのない女衆一人と呼びあげられて 森 つな

真珠湾攻撃を聞く船客の目が日本人わ

れに向くがに 山田百合枝
少しづつ歩行練習する夫に手の届く距離おきて従ふ 山本 千代

老人に甘え許されぬ世となりぬ消火栓開けて放水訓練す 渡辺ちよの

「落葉の節」所感

稲村 幸子

「落葉の節」は藤村省三氏の「雪の音」「愛日」「遍路」に次ぐ第四歌集である。半割りの白菜が噴く水の粒目にとめてスーパールの妻に従ふ 苦しみて痰切るわれの声真似る孫よも

う少しよき真似をせよ
氏の歌が私達に親しみ易いのは日常生活が豊かにあることであるが、然しその内包するものは瑣末的ではなく、ご家族を詠まれた歌にしても、切実に共感を呼ぶものがあるからである。

嗤はれて円空佛の前に立つ現身老いて 欲捨て切れず
老人の孤独のこころ見つめよと後夜しんしんと雪降りつもる

氏に老の歌は多い。然しそれは老醜の歌ではない。否応もなく訪れる老という現実を正視し受容する自若の歌である。乱れ降る雪にこころの動くまま来りて 君のみ墓を洗ふ

わが父を弔ふ歌をたまひたる齡となりていよ恋しも 氏を終始、今は亡き菊池庫郎師（国民文学選者）を敬慕され、師の全人格に心酔し、その歌風に傾倒された。単純化、情趣過剰を排すること、わがまま自由に詠むべきこと、以上三つの師の教えを作歌信条として達成された「落葉の節」の世界には、正に、情感を潜めて単純に自在に、しかも、一言一句をもゆるがせにされぬ作歌姿勢の厳しさがうかがえる。

日翳ればたちまち寒き冬山の落葉の風に吹かれて歩む 死につづく径かと思ふひとり来て落葉の音を足にまとへり

落葉期の自然の中に、死に続く自らの足音を聴き澄ます心奥の、諦観ともいふべき境地から生み出される気韻ある秀歌は、読者の襟を正さしめるものがある。美しきものまだ残る山崎のこの冬山の落葉の霜

井の中の蛙と嘆くこともなし鄙に馴染みてよき友を得つ 荒廃の自然にも、人の心にも、わが里にはまだまだ美しいものが残っている。この後もそれらを探りつつ、第五歌集に備えて秀歌を詠み続けていただきたい。

君のみ墓を洗ふ

君のみ墓を洗ふ

君のみ墓を洗ふ

君のみ墓を洗ふ

君のみ墓を洗ふ

君のみ墓を洗ふ

香塵集を読む

藤村省三

「香塵集」は松本寿賀子氏の第二歌集であって、第一歌集「雪の起伏」以降の作品から、約五分の一に当る五九八首が収められている。橋本徳寿氏を師と仰いで作歌を続けること四十二年、その精進の結晶は珠玉の作品となつて歌集の到るところに光彩を放っている。
 コモスの花粉こぼれし包装紙指にはらひて商品つつむ
 後継ぎのなき古き店守りつつ雪のゆふべに懐爐など売る
 風邪癒えぬ身を励まして店にあり左耳つねに風吹く音す
 真鍮を「真中」と書く商用字やはり私は「真鍮」と書く
 香を売る硝子ケースの硝子棚うすき塵さへ匂へるものを
 金銭に拘る商いに携りながら、対象に寄せる繊細な感覚と、静かにおのれを見つめる澄んだ眼に心を惹かれる。
 天然記念物コウノトリにと運ばるる幾万尾の泥鰌には泥鰌のいのち
 間をおきて哀哀と鳴きゆくは群をはなれし老の鴉か
 枯れ枯れて幾日動かぬ蝗螂に日が射し風が吹き過ぎてゆく

霧はやく月ある空をおし流れ犬病院に犬ら吠え合ふ

集中には、父母、子、兄弟等の肉親を詠んだ佳作を多く見かけるが、それにも増して心惹かれるのは鳥獣虫魚を詠んだもので、女らしい優しさに溢れている。

更に私が注目したのは厨房の歌である。自然死を遂げ得る魚もあるべしと思ひつつ割く秋鯖の腹

お水取りお水送りの季すぎて井戸より汲みし水の甘しも

金串を打ちてなほ息する鮎に鎮花のごとき強塩を振る

塩壺に塩を満たしめ砂糖壺に砂糖満たしむ歳送る夜を

日常の、時には煩わしさを思うであらう營みにさえ、充実した季節感とこまやかな愛情を感じるのである。

歌壇に於ても好評を得ているこの歌集を、一人でも多くの方に読んでいただきたいものである。

各地短歌祭 入賞入選歌

西播磨県民短歌祭

(昭和59年2月26日 新宮町)

夫在りて石切る音の響きるき繁きし仔牛撫でる庭に 日下ふさ

首筋をつまめば猫の無防備に飼はるる甘え見せてさがれり 栗山 節子

次に着るは誰がためならむ冬陽さす部屋にきのふの喪服を畳む 安東はつ子

幾たびか祖の残ししもの捨てて今日の整理に腕が燃えゆく 野中かつ子

店閉めてくつろぐ卓に湯豆腐の角角揺れて煮え立ちはじめ 小倉 法子

魚河岸にならぶ棚より転げたる蛸が器用に地を這ひてゆく 山本 千代

裁縫に毎日使ふ二尺差し物引き寄する事に使ふ 山田百合枝

四十九日過ぎてても心離れざる亡夫の飲みさしの葉捨つべし 赤松 年重

兵庫県春季短歌祭

(昭和59年4月29日 神戸市)

手形割る日は迫れるに百本の桜は雪の競り場に眠る 新田 弘美

雪五寸なべて隠しぬいさかひて並べし畑の境の石も 大谷 吉次

熔接の火花に赤く映ゆる影へだたれば労務のかく美しく 稲村 幸子

六粟郡民短歌祭

(昭和59年8月26日 波賀町)

塩漬の梅の水位の少しづつ増しゆけば待つ明日はあるべし 青柳 良

商品の籠の鈴虫スパーのざはめく中に鳴く声澄めり 野中 勝子

根をはりし事たしかなる葉色見て稲田に今日は追肥施す 北 隆治

売店がしまれば無人の駅となるホームにひとり靴ひびかせる 釜付 靖子

心装ふことこのいらざる定休日ひとり気ままに庭の草引く 瀧元 善子

ハイウエーの端に竦みて蹲る犬を見しより心弾ます 新井 慶子

真向ひの緑の山を蹴り上げむきほひに少女らブランコを漕ぐ 田中 君枝

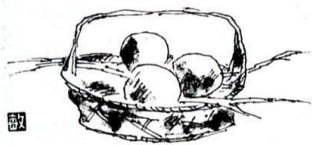
木々の苗球根類も分ちあひ隣家わが家同じ花咲く 森本萬千子

紛れては探す小鉄紐つけて裁縫台に今日よりつなぐ 山田百合枝

兵庫県民短歌大会

(昭和59年11月23日 西脇市)

運転台の窓に突き出す靴の足仮眠はかかる形態にもある 稲村 幸子



田

亡き姑の好みし物も献立に加へて老人
給食作る

山本 千代

受話器より聞ゆる声の幼ければ間違ひ
電話の相手少しす

森本萬千子

窮乏の中より亡夫の買ひくれし時計を
腕に護符のごと巻く

田中 君枝

人工心臓をつけられし山羊が生き続け
頭すり寄す医学者の手に

新井 慶子

角皮症癒えたる両手はとぼしる水に打
たせてしみじみとゐる

石戸 泉

わが身をも冒しゆかむかごとごとく浮
塵子殺すと今撒く薬

北 隆治

昇降機に閉されてゐる十数秒人ら孤独
のごとく黙せり

大谷 吉次



第4回

山崎町俳句大会 (楠風閣にて)

山崎町俳句協会 福田 泊水

山崎俳句協会雑誌「青嶺集」

(山崎)、下村君子(山崎)、本條淑子(山崎)、藤村美千代(千種)、松本澄子(千種)、前野千恵子(山崎)。

山崎町文化連盟文化部の部門である俳句協会主催の郡内俳句同好者対象に依る俳句大会は、本年度早くも四回目を迎へ十一月二十五日八幡神社楠風閣に於て開催された。出句総数は一八〇余句あり、

本年は次の三人の選者―和田疎人(山崎)原田魚梯(相生) 中野秋藻(姫路)ら「九年母」

「若葉」の同人が選出に当り、特選五句と秀逸十句、入選二十句を選出し、各選者より優秀作品には選評を試みた。

入選句は次の通りである。

山崎町長賞 山崎 高野志都代

楫は妻に委ね時雨るる海風突く

山崎町文化連盟会長賞 山脈 小紫い

晩秋の風黄泉路より恐山

山崎町議会議長賞 山崎 薄木満寿恵

秋燈に白磁観音思惟深し

朝日新聞社優秀賞 山崎 原田小次郎

時雨るるや鳴き交しいる檻の鶴

神戸新聞社賞 山崎 福田 泊水

木守柿梢に高く空澄める

曼珠沙華聚落赫き裳裾曳き

山崎 猪尾 清子

敗軍の幡の如しや鳥威し

山崎 青柳 有紀

ペンだこの今は鋤だこ秋耕す

青嶺 村元 優子

しぐれきて束の間虹をかゝげたる

山崎 芦田 八重

柿の種口尖らせて飛ばしけり

山崎 小畑 めい

長き夜の夫の引く辞書古りにけり

山崎 山田 東軒

時雨中一途に釣れる人ひとり

千種 春名 重子

外灯の圈内ごとに雪降れり 芦田 八重

憩ひたる石に合掌通路発つ

嫁ぐ娘と寝物語りを離の間に猪尾 清子

ふとしたる誼みに届く今年米

蟹の家路より低し遍路行く 石野 光栄

大桶の凧入れてどよもせり

藍がめの藍かきませる花曇 大谷 延子

秋刀魚焼く今が倅せかも知れず

ナイターの照明消えて天の川高野 南嶺

木枯に吹きさらされて金策に

蠅叩き無心の孫のたくみなる沢田ちゑ子

山女釣りの芽も摘みて歸り来し

待つ事も楽し遅日の花時計 下村 君子

競ひ合うごとひしめきて花芽出づ

脱疽病む父に最後の冬ならむ神名 沙羅

宵闇に白くあやしき雛の顔

雪積みて雪なき街をバス走る田中 良子

展望台新樹隠れにチャイム鳴る

木枯の吹き残したる高嶺星 中野 秋藻

郵便夫炉辺に稿らい深雪村

嫁ぐ娘の彼も加わり初写真 永井とみ代

スキー積んだまゝの車で通勤す

心得てゐておどかさされ威し銃原田 魚梯

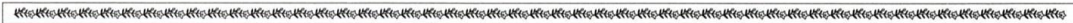
これ以上褪せぬネクタイして案山子

銀漢や砂漠の民は砂に寝る 原田小次郎

柿熟るる兵送りたる道今も

山崎 原田 駆雲

遣されて二年の忌よ石路の花



恐龍の標本めきて枯芭蕉 原田小次郎
夫婦離世門にかゝれば寄添ひぬ原田驅靈
眠れば凧海の響きあり

学園は白一色や更衣 秦 千里
巢燕やのみ出すまでに育ちをり

春宵の誘ひの電話名を告げず福田 泊水
歸へり来て主婦に戻りて秋刀魚焼く

サングラス選びて心旅にあり藤家 千代
巫女の鈴聞ゆるごとく枇杷生れり

木枯や飛びなやみいる鳶一羽深川 春雄
朝静か畑大根の太る音

岩がくれしぶく荒磯を遍路行く前野千恵子
せゝらぎに木の実たまりて水堰けり

爆竹に始まる花火華僑街 村元 優子
いつの間に静かな雨や鉦叩

歳晩の部屋にひしめき蘭咲ける山中恒女
永き日や老手すさびの離つくる

潮風が終日煽ち破れ芭蕉 山田 東軒
ストープ焚き分教場の教師たり

少しづつ育つ球藻や暖炉燃ゆ山田 磯女
凧のやみたる闇の恐ろしく

鴟尾光らせて一と刻の春時雨和田 疎人
癒ゆ望みなき現身も汗出づる

「山脈集」

初夢や童女となりて野をかける淡路澄女
父と子の対話とぎれて蜜柑むく

汐風に鮎子乾く小漁場 秋久光子
路地静か立て簀の陰に西瓜売る

黒の画布一面に咲く大花火
溝浚へ色褪せし鞠流れゆく

初夢や心の隅の妻に会う 梅田梅風
紫陽花の彩つやゝかに粉糖雨

玫瑰の紅き実揺りて海の風 尾崎鈴子
点々と颯取る船朝霞

酒釀すてふ葡萄熱れ淡き金色 高野志都代
刃当つればびと罅走る大西爪

石積めば石も佛よ桜散る 小紫い
潮騒は鳴咽の如し桜貝

葉桜や池一面に蕊の波 小畑柏人
五時早も目醒め居るなりねむり草

初夢や遠き童の独楽まわる 高野薫風
蝦の髭動くが見えて秋の水

葡萄棚重き房垂れ山日和 白谷好子
硫黄吹く賽の河原や秋の風

暗がりに垣根話や夜の秋 杉本いし
底石のしろく見えて秋の水

絵筆濯ぐ彩流れゆく水温む 田中 恵
子狐を山へ葬りに著我の径

峡深く行けばいよいよ水澄める谷林はつ糸
被災地は崩れしまゝに紅葉して

八十路なほ生きる伴せ福茶汲む戸田五山
早春の牡丹稚き芽を兆す

ふたもとの藪の野梅に遅速あり中野治水
立話領くばかり懐手

遠足の列陽炎の遠巻に 野村静山
丘削り風土記の森の冬木消ゆ

もじずり草花の螺旋を組み終えし 本條栄女
出船待つ浜の茶房に島遍路

まろび寝の老の肌冷え夜の秋 宗平素栄
藪陰の残雪斑冬母

眼下に瀬戸の海照る蜜柑狩 山野源子
冬仕度まづ抽出しの小物より

寒鮎も光に動き水温む 安井方円
薪割って山小屋の軒冬支度

過疎の村初燕来て賑えり 山下そ
連翹の籬に蝶を見失う

萩夕べ留守は気儘や独りの餉 山口美根女
海苔粗朶の幾何模様して冬の風

夜さくらやカラオケ弾む一と筵横井雪子
神無月神在さねど願いごと

初夢に天折の姉美しき 和田疎人
屋根の石ふやし荒磯の冬構



芸能祭について 事務局

第六回秋の芸能祭も、各団体のご協力を得まして、盛會に催させていたいただきましたことを、厚くお礼申し上げます。
今回の運営にあたり、実行委員会では、次のことを実行してみました。
一、開演時間を一時間繰上げ、十一時開演としたこと。
二、観客の増加を図るため、町広報や農協広報に掲載した。
三、芸能祭終了後、反省会を開き、六十年年度の運営（特に観賞者の増加を図る）についての意見交換をしたこと。
反省会での諸氏のご意見は、六十年年度の芸能祭に反映させたいと存じます。



文化と美術協会

山崎美術協会
横江敏夫
(柏峰)

「広辞苑」によると、文化とは世の中が
進歩して文明になること。

民族、種族など一定の人間共同体が、自
然または、野蛮の状態のまま止ることな
く特定の生活環境の実現を目指して、物
的には、自然の状況から脱却して、生活
水準の向上を図り、心的には生活理想の
実現のための精神的陶冶、練成、洗練な
どの意味を常に含むことである——と
記されている。

明治のはじめ、文明開化が政治の中心
課題であって、急速に西洋文化がとり入
れられた。そして優秀な日本民族は、完
全にこれらの文化を消化して、明治・大
正・昭和と限らない進展を続けてきたが、
これらは主として物質文明の分野であつ
た。

文化という理想の追求は驚くほどの早
さで私達の生活を向上させた。だが残念
ながらその反面、生活理想実現のための、

精神的陶冶、練成、洗練などの精神文明
は急速に荒廃し、日本民族の病巣となつ
ている。物質文明と心的文明は車の両輪
の如くバランスを保ちながら進化してゆ
かなければ、真の文化の発展とは言えな
いのである。

そうした意味で、文化連盟の役割は重
く、連盟に属するあらゆる部門の結束が
期待されなければならない。

さて、文化連盟の一員である美術協会
は、この数年、故あって停滞を余儀なく
されていたが、多くの反省の中から新し
い活動を模索している。底辺の拡大もそ
の一つである。

岩絵具を駆使して、美を探求し創造す
るグループと、文人が余技として書く水
墨淡彩の筆致を尊び、趣致、風韻を求め
る近代南画のグループである。

現在、一宮町も含め七〇余名のグルー
プが成長しつつある。けんらんとした美
術の花を咲かせるにはほど遠いかも知れ
ないが、これらの仲間が、地域の精神文
化発展の中核になる日は遠くあるまい。

この数年、仲間たちの情熱ある行動に
ささえられて、今ようやく暁の陽光を見
たのである。この仲間たちと、ご支援い
ただいた周囲の方々に、心から感謝した
い。

女性の囲碁

山崎囲碁同好会
高野圭介

山崎の囲碁界が、また、新しいエポッ
クを迎えることになりました。

女性の囲碁ファンが急増してきた唯今、
この春、山崎町に女性の囲碁同好会が誕
生いたしました。その名を風鈴会（藤井
久子会長）とし、月二回、定期的に鋭意
研鑽に努めています。

折しも、念願かなった女性だけの囲碁
大会が催されることになりました。
昭和五十九年九月三日、山陽はりま囲
碁まつり女性名人戦において、上牧谷の

福本定代さんが堂々の優勝を遂げられた
ので、この快挙をご報告いたします。

実は同日、山陽はりま囲碁まつり学生
名人戦Bクラスにて、山崎小三年の田中
成門君も見事優勝されました。

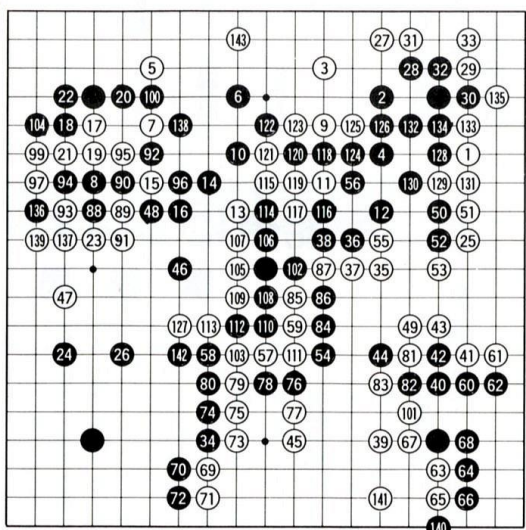
因みに、同日の県下支部対抗戦にて宍
粟郡支部も優勝でき、おかげさまでトリ
プルクラウンになった次第です。

今回の壮挙をお祝いで、栄冠のお二
人に記念碁を打ってもらいました。

★ 優勝記念対局 ★

昭和59年10月24日 於 囲碁道場 敲玉

山小3年 田中成門(子供囲碁教室)
五子 上牧谷 福本定代(風鈴会)



98は(15)にツグ 143手完 白中押勝

佛教と文化

山崎茶道研修会

朱山

毅

数年前から私は、佛教に魅せられている。実は佛教というものを知るといことが、今後の日本文化に大きな意味をもつのではないかという気がするからである。佛教によって影響を受け形成された文化を、もう一度確認されなければならぬ。そして、その確認の上にこそ、われわれの文化創造がなされるからである。そういうことをひしひしと感じる。

日本の明治以後の国語教育の中で、佛教はほとんど完全に落とされてきた。このことは、日本文化をどう見るかという問題に、非常に大きな影響を及ぼしてきた。

その証拠に、国語教育の中で現在どれだけ佛教を理解し、教えられているか、たとえば雄大な思想を比類なく雄渾な文体にもった見事な空海の文章、一言一句が無常な人生の前になつ緊張感にふるえるかのような源信の文章、あるいは、内面の深い罪のうめきを、ねばり強く追いかけるような親鸞の文章、そして、無類の宗教的情熱を、断定的な命題に託した日蓮の文章、それらの文章は、日本のもつともすぐれた人間が達することの出来た、もつとも深い精神の表現だと思ふが、

こうした文章は、いつさい国語教育から落とされている。

古い文化をもち、しかも佛教が文化の中心にしみこんだこの国では、もつともすぐれた精神は、多く佛教思想の形をとつて己の思想を語った。おそらくこうした文章は宗教的という理由ではずされたのであろう。

われわれに優れた文学を残した人々、吉田兼好、鴨長明、あるいは紫式部や世阿弥といった人々、彼らはすべて経典を読み、魂の糧をそこから得ている。佛典の知識なしに日本文学を理解しようとするのが国語教育の基本的方針だったのである。

日本人の造り出した文化はどういうものか、このような思想に考察の目を向けるとき、それまで日本文化をみる上で決定的影響を与えてきた先人の業績、体系的文化に対する深い理解と、思想の体系性という点では、鈴木大拙、和辻哲郎の日本文化論をもつともすぐれたものと考えるが、われわれはが先人の仕事の意味とその限界を知ることによって、今後の日本文化を、如何に発展させるべきか明示されるであらうと思ふ。

日本舞踊とのあい

山崎邦楽・邦舞研究会

河崎よし子

舞踊について定義するようなおこがましい気持は毛頭ありませんが、日本舞踊を稽古している私には、その歴史の一端を知る必要があると思ひ、改めて、書を繙いて見ました。

舞踊と言う語は、もつぱら明治以後に用いられたもので、それ以前は「舞」と「踊」に大別してそれぞれに使われていました。「舞」の根元は、宗教的な呪術動作「神楽」に求める事ができ、「日本書記」の「天鈿命」が、天の岩屋戸を開いた伝説にまで遡ります。古代から行われてきたいろいろな「舞」が、奈良時代から平安時代にかけて、外来の舞踊に接し、これを取り入れる事によって、芸術的に大いに進歩しました。「踊」は、室町時代から近世にかけて、庶民の勃興と共に大に行われ、乱舞形式のものが、盆や祭りに盛んに行われ、中でも念仏踊りが、大きな分野を占めておりました。「出雲の阿国」は、これらを一変して、「かぶき踊り」に仕立たのが、現在の歌舞伎の始祖になったのです。以上

書にはいろいろな事が書いてありました。中から私なりに得た知識です。このような伝統の有る日本舞踊の稽古を始めしたのは、二十余年余り前からで、当時私は幼児教育の大切な仕事に携わっておりましたが、保育上の悩みが続くため、ストレス解消と心ゆとりを持たなければと、週に一日、勤務に支障の無い程度で習い始めました。幸い小学校時代に箏、娘時代に三味線を三年ずつ稽古しておりまして、素直にこの道に入ることができました。舞踊の道と保育の道は、原点が共通しているように思います。例えば、舞踊も「動」と「静」の組合せによる変化に終始します。又、礼儀作法が芸の要素として大きな役割を持っています。保育計画の「遊び」の領域にも「動」と「静」の内容が必要です。又「おはようございます」から「さようなら」まで一日の生活の中で多くの習慣づけが重要であり、両方共、心と腰がしっかり入っていないければ進歩しないと思ひます。このように考えます時、舞踊が私にとって大きくプラスになったと感謝しております。古く悪い習慣は捨て、古くても良い伝統を守りながら、幸い良き師を得ておりますので、山崎町の邦舞が益々発展するように又、健康で情操豊かな人となるため稽古に精進したいと念願しております。

世阿弥の著述から
山崎謡曲同好会
藤多克己

世阿弥の著述の中心課題は「花」ということであり、その花をどうやって咲かせるか、花を究める稽古修業はどうあるべきかが述べられております。

彼の教訓は現在にも通用するもので特に専門職業につく者はかくあるべしと教えてくれているようで深い感銘を受けます。以下、私流の抜粋を試みます。

彼は能役者は能以外のことはすべてなげすて、芸のみに没入し順序正しく休まずに修業を積むべきであると言います。

一時的な名声、利益に惑わされて、芸道の根源を忘れ、正しい伝統を見失ってはならないと言います。又「因果の花を知る」とあります。この世の中は、みな因果の關係にあり、初心の時から身に付けて来た数々の芸は因であり、能に熟達し、名声を獲得するのは果である。従って原因となる芸の稽古が不十分であっては名声を得るといふ好結果を得ることも困難だと言います。

また、時の運をも恐れ慎まねばならない。去年が芸の花盛りであつたら、今年

は花が咲きにくいことを覚悟すべきである。また短い時間のうちにも、男時、女時と言つて運勢の良い時と悪い時がある。能でも努力のいかんにかかわらず、一方に良い時があれば、反面必ず悪い時もあり、これは人力ではどうにもならない因果の道理だと言つております。

また、舞には「目前心後」という心得がある。観客が見る演者の舞の姿は離れた所から見ると姿であり、演者自身の見ると自分の姿は主観的なものであつて観客の見方ではない。演者は自分の肉眼で見ることの出来ない所まで心眼で見極めなければならぬと言います。また「万能一応」即ちよろずの能力より一つの心が大切である。心を主体として演ずる時にはその人の業を越えた上手としての名声を得ることが出来ると言います。

最後に彼は、わが観世座に「万徳一徳の金言がある。それは「初心不可忘」の一句で、これには三ヶ条の口伝がついております。

- 一、善悪を問わず、初心を忘れるな
 - 二、その時々々の初心を忘れてはならぬ
 - 三、最後の初心を忘れてはいけない
- 老後すら初心と心得て一生涯初心を忘れずに貫いてゆけば、能は退歩しない。行き止まりを見せずに一生を終る事を、わが観世座の奥義とし、子孫を導く秘伝とすると、彼は結んでおります。

わが観世座の奥義とし、子孫を導く秘伝とすると、彼は結んでおります。

温故知新

山崎茶華道協会

下村宗節

十一月の声を聞くと茶の湯者は誰しも口切りという事を考え催したいという思いにかられます。畳の表を返し垣を青竹にゆいかえて炉を開き炉壇も塗りかえ露地の塵もはらい、心を浄め接客の用意を致します。招かれた客は心閑かにしつとりと打水された露地にむかいます。炉中につがれた香がかすかに腰掛にまで漂よってきます。客は順次手水鉢を使い心身を浄め、茶室へと進みます。一瞬のひそかな然も和やかな緊張こそ茶人のみの知る喜びでございます。

水屋の方からは、壺から出されたばかりの新茶を挽かれる茶臼の音を聞き乍ら会席を頂戴し、そのあと衣服を正された御亭主が丹念に練上げられた新茶の香味は、又格別でございます。

春に摘んだ製茶を茶壺につめ密封し、秋までねかせたものを十一月に始めて封を切り、客と共に新茶を味わうのを「口切り」と申しまして、茶の湯者の間ではお正月についてめでたい行事の一つとされていきます。

近年葉茶も手に入りがたく茶臼を挽く機会もだんだん遠のいてまいります。これも慌しく流れゆく時代のさまとしてどうすることもできないこの頃でございます。

口切りの主役は真壺でございます。茶道具を代表する主な道具として古来扱われてきました。まず安土桃山時代といえましょうか。それを立証しますが、天正十五年正月三日、大阪城での秀吉の大会の莊り付けでみられますように、瀟湘八景の名幅をかけられ、その前にそれぞれの名壺をほこらしげに飾り、秀吉親から客をもてなし、水屋では宗易(利休居士)に茶を挽かせ、たつぷりとのみせたとあります。

茶壺も二転三転し、王座より下り実用化(庫的存在)し、そして又、今では全く飾り物的存在となりました。「口切り」それは茶人にとってほのかな郷愁さえ感じるようになりました。たとえ形だけでも、このともし火は絶えさせてはならない。

年に一度位は標を正す思いのお茶を考へ、古人の心を新しい時代へと伝えてゆきたいと思ひます。

裏千家十一世玄々斎精中御歌

衣食住道具も露地もおごりなく

誠意にはげむ茶事の明け暮れ

若西神社の 獅子舞と稽古

福井 久夫



古老の話によりますと、奉納獅子舞は昔より郡内各神社で盛んに演舞され、そのほとんどが出雲神楽の影響を受けた舞で、江戸時代に山崎八幡神社や若西神社はこの北の地方より伝わって来たものを共に習って奉納したのが始まりであると言われております。従って山崎八幡様の舞と若西神社の舞はほとんど同じであったと言われております。

若西神社の獅子舞は昔より当屋制にて三つの当屋が順番に奉納を続けて来ましたが、昭和五十七年度に若西神社獅子舞保存会を結成して、神社と保存会と部落の三者が協力して奉納を続けております。古老達の努力により大変たくさん曲目が継承保存されております(曲目十三)。

その演舞方法も獅子が当屋を出発し、神社に参拝迄の道行の舞から始まり、儀式的な式三番の舞、舞台入り、やし、つるぎ)の各舞より、その舞い方にも動の獅子静の獅子をたくみに取りませ、又観衆の興味を引く子役を適当に配し、天狗やお多福を配した獅子により後半の見せ場を舞い、最後には技術的に非常にむずかしい猿又返しの技で締めくくっております。

この様に変化に富み、しかも均斉のとれた演舞方法は、昔の人が長い間の経験と知恵による成果であろうと思われれます。

獅子舞は素朴な芸であります、獅子頭がしを自由にあやつるには大変な稽古が必要であり、昔はお盆が済み次第稽古に掛り、六十日間もの長い日数を毎晩稽

古を続けました。娯楽の少ない時代でもあり、又たまに出される白い御飯の会食を共にするのを楽しみに、多くの青年が厳しい練習を積みました。

娯楽は氾濫し職業も多様化した現在、昔程の稽古は出来ませんが、それでも約四十五日位は毎晩稽古を続けております。部落内でも顔を合わす事も段々少なくなり、又一堂に会して語り合う機会も少なくなつた今日、大勢の人が集まり、共に語り共に汗を流す稽古、この稽古こそが人の和をつくり、古里づくり、町づくり

に今日の意義の深いものを感じます。

伝統芸能を維持保存していくには多くの困難がありますが、これを克服して末長く演舞奉納される事を切望します。

山崎町の史跡 (その二)

山崎郷土研究会 久保寅夫

山崎郷土研究会の建てた史跡碑は山崎文化の二号に「山崎町の史跡」として紹介されているように、三十基にも及んでいます。これらの碑文

については会報に記載されましたが、今度小冊子にまとめることに史跡部で決定し、目下準備をすすめています。本夏炎暑のなか、史跡部の方々と

町内三十箇所に点在する碑を確かめました。史跡の殆んどは見る影もなく荒廃して跡形もなく、往昔を偲ぶよすがもない状態に残念に思いました。

昨今他町においては、史跡保存のためいろいろと努力をされたり、復元を図られていると聞きます。山崎町においても史跡の保存を考えなければ、史跡は全く

姿を消して、淋しく味けない町となる恐れがあります。

史跡は、山崎町の発展の歴史でもあり、私達の祖先の生活の一端であると思ふとき、僅かなものであつても、保存すべきであると思ひます。私達が史跡のいわれを知るとき、史跡は私達に語りかけてきます。遠い昔の祖先の生活に想いを寄せるとき、当時の苦しきや楽しきがしのばれます。このことは山崎町を愛する心に繋がるものと信じます。

町民の一人一人の方々に、史跡保存のためにご協力をお願いします。



吟道と私

詩舞道連盟 田口実

敗戦混乱期の三月、小学校六年生の卒業式後の茶話会で、校長先生が気魄のこもった大きな声で、少年老いや早く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず、と吟じて下さったのが、今も尚、私の脳裏に残っている。

そして中学では、子曰クなど極く初歩的な漢文について習い、高校では漢詩の由来、性格、規制等について少々教った記憶がある程度の知識しかもっていない私が、係長になって間もないある日、配下の一人から、詩吟をやりませんか、と誘われたのがきっかけで、今日に至ったものです。

最初は只大声で吟じるだけが、この会であると思っていたが、だんだん月日が経つにつれて、「道」ということを覚え、参考書を買って求めるなど楽しみが又一つ増えた嬉しさは今も変わりはない。

詩歌の朗詠がわが国で初めて行われたのは、今から千二、三百年前のことであり、吟詠もそのころに誕生し、伝承の過

程で多くの工夫が加えられ、日本人の心をうたう芸道として成長してきたものとするされている。

吟道の真髄は、礼と節を重んじ、和を尊ぶことであります。作者の気持、詩の内容を知り、感情をこめて吟じるときこそ、自身の心が安らぐものである。

しかし、大凡「道」のつく習い事、稽古事には、修練とか、鍛練という言葉が聞かされるものである。

斯道においても、私自身好きな言葉であるが、聞く人達は、どう理解されるだろうか、単に修養すること、きたえ練ることだと、その意味を解している、それを実行することができないのが常である。それは、天賦の才能に恵まれなくても、地道に「コツコツ」と努力を積み重ねることに、詩の内容、作者自身の心が理解でき、その教訓を自己の日常生活の中において素直に受けとめ、実践することが、修練とか鍛練に結びつくことではないでしょうか。

作文の嫌いな私に立派な原稿が書けるはずがないが、今日まで吟道を通じて教わったことによる文章表現をし、自らを見直し、点検することが大切であると思います。



心に響く合唱を求めて

YOB片山澄之

「合唱は、聴くよりも歌う方が楽しい」と言われるように私も、メンバーがそろって歌う時が、一番楽しいのです。

指揮者の指示に従ってその曲想や詩の心を表現しようとする時、心にピンと緊張感が走り、すべてのことを忘れてたいたいちに歌うことに集中する。お互いの目が輝き、目的に向かってひた走ります。そうして指揮者の要求にピタッと合って、思った表現ができた時は、初めて目がゆるみ心がなごみます。私は、このひと時のすばらしさを求めて、YOBで男性コーラスを続けているのです。

YOBのYは山崎、Oはオールド、Bはボースズの意味を持っています。団員の年齢は二十代から五十代まで、職業も自営業者あり公務員あり、様々です。歌う力も、譜が読める者から読めない者まで、幅広です。

只今の団員は十名で小人数です。練習するたびに、「もうちょっとメンバーがふえるとええのになあ。」と言いながら、もう七年も過ぎました。少ないメンバーでも、昨年は十月に相

生の「西播磨コーラス大会」に出演しましたし、十二月には山崎町の「秋の音楽祭」に出演しました。歌った曲目は、「グリークラブアルバム」より、「いざ起て戦人よ」「婆やお家」「小夜曲」「見上げてごらん夜の星を」でした。(両会場とも、山崎町民合唱団のママさんと共に、「森の協会」を歌いました。)

本番のステージで、練習の時の二倍も三倍も緊張して、聴衆の前で何とか歌い終わり、想像以上に盛んな拍手を受けたり、身近な人から「よかった、よかった」とほめられたりしました。私達はそれを真にうけて、「まあまあだったなあ」などと、満足していました。

YOBの練習日は日曜日の午後八時から行います。日曜日の夜、毎週出席をするのは折角の休みをなくしたようではない感じですが、YOBが安定したハーモニーで、多くの歌を歌いこなすためにはそんなことは言っておられません。このような意気込みでありますので、皆様のご協力をお願い申し上げます。



世はまさに生涯学習時代

山崎将棋同好会 後藤 一孝

山崎町において、古くから将棋が親しまれ、縁台将棋から座敷将棋まで、場と空間において人生がうまれてきた。

時代の変化にともない、将棋の世界においても、町民の愛好家の中で趣向が変わり、場においては、洋間や卓上で将棋をさし、空間においても、数多くの人達と共にさす時代になってきた。将棋の大会においては、従来は大人だけの参加であったが、近年、小学生・中学生の参加も増えてきた。

昨年は、山崎町教育委員会、子供会連絡協議会との共催で、子供将棋大会を開催したところ、数多くの小学生、中学生の参加があり、将棋同好会にとっても未だの展望に明るさがでてきた。常日頃、同好会の役員による指導、啓発が不足しているにもかかわらず、青少年の将棋愛好者が増えてきていることは、まことにうれしい。

本来、私達同好会会員は、後輩の育成、指導を果たす役割を担っているが、得てして個人の棋力向上が重視される傾向になっている。古代から将棋が親しまれているが、将来にわたり将棋文化を高

ていくには、やはり啓発、啓蒙が大切になってくる。私達役員は、この趣旨を改めて理解し合い、町民の文化意識の高揚を果たすため、青少年から高齢者まで、共に親しみやすい将棋の世界から努力いたしたいと考えている。

世はまさに生涯学習の時代、生活の中の豊かさや質を求めていく時代に、生活文化の向上をはかるため、生涯にわたって自己の能力を開発しながら、共に生きる喜びを得る社会を形成していきたいものである。このことにおいて、山崎町においても総合的な施設整備、充実をはかる必要があり、行政との協調性のもとに努力を重ねていきたい。特に文化の殿堂である文化施設の建設については、行政と文化団体等の一体性の中で、前向きな参画の場を求めてやまない。



後記 編集

編集長

根岸元彦

本誌も三号雑誌の壁を越えて、第四号を送ることとなった。誠に喜ばしいことだが、一方、前会長 庄先生を失ったことは本当に残念である。心からご冥福を祈りたい。今、ありし日の温顔をまぶたに浮かべながらこの後記を書いている。

今回は特に注文をつけてお願いした関係もあつて、多数の新顔の方が寄稿して頂いて、新鮮味溢れる内容となったのはよかつたと思う。今後もこのように、次々と新しい顔ぶれで執筆して頂き、出来るだけ多数の文化人に登場して貰えることを願う次第である。

しかし再び慾を言わして貰うと、やはり文芸面で新人が現れないのが淋しい。どうか遠慮なしに、町教委内の事務局に投稿して頂くか、又は山崎文学会の方に入会して貰えば、自分の作品を発表する機会が得られる訳だから、創作意慾を抱いている新人は、奮ってチャレンジしてもらいたいと思う。手前味噌になるけれど、山崎文学会でも、年数回の文学同人雑誌を発行していることだから、相当の長編でも載せることが出来る。

とにかく、何とかして、何らかの方法で、少しでも郷土の文化を広げ、深めてゆきたいものだと思う。

トクサヤ結納店

町山田山崎郡栗宍
電話 2-0067番(代)




飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」なるものにたどりつき、自作自演で20数年を歩いて参りました。46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければならないと常に進言し、流通の世界の中で使命感に燃え、生活文化の向上を願って多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

〈飛石農機〉〈トビシ住設〉〈飛石建機〉〈飛石レンタリース竜野〉

◆最新型カラー現像機導入◆
 カラープリント・スピード仕上げ
 良い品を・安く・安心して買える店



Specialty Camera Shop
コーエーカメラ
 宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎ 2-2089

山交タクシー

山崎神姫バス西隣
 電話 07906-2-2166(代表)

寿

幸せへの旅立ちに——。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181 TEL (07906) 2-0052

たしかな技術で世界をむすぶ

NEC

兵庫日本電気株式会社

兵庫県宍粟郡山崎町須賀沢231番地 ☎ 播磨山崎 (07906) 2-1222代

登録商標



山陽 盃

高級清酒

名
轟
四
海
聲

兵庫県山崎町山崎
山陽盃酒造有限公司



兵庫県山崎町 **老松酒造有限公司**

地元ひろがる

心のふれあい

にしん



西兵庫信用金庫

理事長 杉元清美